

今日の黙想のてびき

週日聖書日課 エレミヤ書 26：10～24
2026年3月14日(土)

◆文脈と言葉

- エレミヤ書第 26～29 章(と 36～45 章)はエレミヤの生涯について語られています。それは厳しい預言のゆえの受難の物語と呼んでよいものです。ユダ王国が滅亡しようとする中、いくら悔い改めを語っても指導者たちは聞く耳を持たず、かえってエレミヤを攻撃します。神の言葉が届かない、悲しみの預言者の物語です。
- 第 26 章前半には、エレミヤの神殿での悔い改めと裁きの預言により、命が狙われることになったことが記されています。

◆あらすじと説き明かし

- 10-15 節：死刑を求める裁判でのエレミヤの弁明
高官たちは裁判官であり、祭司と預言者達は告発者です。祭司や預言者たちは「この男は死刑に値する」と訴えますが、対する被告エレミヤは、自身を遣わした神の権威を主張し、改めて悔い改めを勧告します。同時に、「私を殺せば、あなたがたは罪のない者の血を流す責任を負う」と警告しました。神の人である預言者を無実のまま死刑に処すことは、過ちを重ねることであり、神への決定的な背信に他ならないからです。
- 16-19 節：死刑にあたらぬ
エレミヤの弁明（実際は預言です）を聞いた高官たちは、「この人は死刑にはあたらぬ。主、我らの神の名によって語っているのだから」とその訴えを退け、民もこれに同意します。このとき、長老たちが立ち上がり、約 100 年前のヒゼキヤ王時代の預言者ミカの前例を引き合いに出しました。ミカがエルサレムの崩壊を預言した際、王は彼を殺さず、かえって主を畏れて悔い改めたことで、主は災いを思い直されました。長老たちは、神の言葉を聞かず預言者を殺害することが神への反逆であると主張しました。
- 20-24 節：預言者ウリヤの死とエレミヤの保護
ここにもう一人、同じように裁きを預言したウリヤという預言者がいましたが、ヨヤキム王は彼を処刑してしまいます。エレミヤは無罪宣告にもかかわらずなお命の危険がありました。しかし、アヒカムがエレミヤを保護します。
ウリヤを殺した王に狙われているのですからエレミヤの命の危機は深刻であり、このあともその危険は続きます。神の言葉に忠実であることは必ずしもこの世での安全を保証するわけではないのです。確かに神はエレミヤを守ってくださいますが、それは決して当たり前のことではなく恵みです。